

---

# 君の声を聴かせて

刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君の声を聴かせて

### 【Nコード】

N26710

### 【作者名】

刹那

### 【あらすじ】

いろんな人には、それぞれ相棒が居ると思う。

皆、絶対一人はいて、まだ出会っていない人もいるだろうし、もう出会っている人も居ると思う。

きつと、相棒の事を「運命の相手」と呼ぶ人だっているだろう。

それが、例えば恋人だったり、家族だったり、友達だったり・・・

ーこのお話の主人公の相棒は、自分の家にある、一台のグラブドピアノ・・・。

——この小説は、そんな相棒と毎日を過ごしていく、音楽ストーリーです。

・よければ読んでやって下さいまし。



．．ゆっくりと、自分の指に込める力を強くした。

「君」が、綺麗な声を奏でる。

白く、美しいその姿に、ほ、と見惚れた。

それと真反対の暗闇が君のからだたまざり、月光に反射して、黒く、白く、輝いていた。

．．．．．

「美春、みはるおはよっ！」

澄んだ可愛い声。

後ろを振り向くと、親友の「鈴原すずはら 愛華あいか」が立っていた。

．．相変わらず、綺麗な長い茶色の髪を風に揺らし、クリクリした大きい目でこつちを見つめている。

「愛．．おはよ。」

愛、というのは愛華のあだ名だ。

何と無くそつちの方が呼びやすいのでそう呼んでいる。

「なにー！寝むそんな顔して！．．あ、さては昨日も．．」

「．．．．当たり。午前4時くらいまでやってた．．．」

「．．．．やっぱりー。もーどんだけ好きなのよ」

「．．．．だって．．．楽しいし．．．」

「・・・そう言つと思つた。」

「・・・アハハ・・・」

そう言つて笑つてみる。

・・・2時間くらいしか寝ていない為、太陽の光が目には沁みてちよつと痛かった。

「・・・それじゃー学校行きますか。」

愛華が言う。

私も頷いて、コンクリートの上に足を踏み出した。

・・・

「おはよー。美春。」

クラスに入ると、友達が声をかけてきた。

私も「おはよ。」と返事をして、自分の席に腰を下ろした。

・・・

「おーい、皆席つけー。出席とるぞー。」

ー「李家美春」。

・・・担任の先生がクラスにノロノロと入って来て、出席をとり始めた。

ちなみに、「李家美春」というのは私の名前だ。

苗字の最初が「い」の為、大抵は私が一番最初に呼ばれる。

．．私は「はい。」と適当に返事をして、そのまま机に突っ伏した。

（．．．あー！。眠．．．。）

．．．ついつい「君」に夢中になって約6時間。

昨晚はずっと「君」と一緒にいた。

月に照らされた「君」にもたれ掛かって、そのまま寝てしまった程だ。

「．．えー。それじゃあ授業始めるぞー．．」

先生の声が遠くの方で聞こえる。

私はウトウトと半分睡眠状態に陥りながら先生の話を聞いた。

．．．

．．．鐘の音が私の耳に引っかかって、ハッと体を起こす。

目の前には見慣れたクラスメイト達が談笑中。

うつすらばやけた視界が広がっていて、体は何と無くスッキリしている。

．．そこで自分が寝ていた事に気が付いた。

（あ、ヤバ．．授業全然聞いてなかった．．）

私はそう思いながら肩を回して、軽く背伸びをした。

肩からコキツという良い音がして、ちよつと気持ちよかった。

．．．

・・・「美春ー、ご飯食べよー！」

そう言っつて私の机の前にやっつて来たのは愛華。  
ニコニコしながらこっちを見ている。

「・・・あ、うん。勿論」

私もそう言っつて笑い返す。

私達は机を繋げて、お弁当を取り出した。

「・・・うん、美味しい！あゝ授業肩凝つたゝ！」

愛華が肩をトントンと叩きながらそう言っつた。

「ハイハイそうですねお婆ちゃん。」

「・・・あ、言っつたね、このピチピチ女子高生に「お婆ちゃん」  
て言っつたね。」

「・・・アハハ、ごめん、冗談だよ」

「・・・イヤイヤちゃんと聞きましたよ、お婆ちゃんて言っつたね  
？」

「・・・ちょ、愛華、なんか怖いつて。」

「・・・言っつたね」

「わ、ゴメン、ほんと嘘だから。」

「・・・お婆ちゃんかぁ・・・。へ〜お婆ちゃんかぁ・・・。」

「ちょ、愛華さん、オーラーどす黒いから。マジビビるから。」

「え？何のこと？お婆ちゃんの私に何か言った？」

「ゴメンゴメン、冗談が過ぎました。はい、スイマセン。」

「・・・まあ良いでしょう、オホン。」

「・・・はは、良かった。」

「・・・それにしても、お弁当旨か〜。」

「何人だよ。」

「へ？ナニが・・・。」

「いや、その喋り方。」「うまか〜」だって。最近の女子高生が「うまか〜」だって。」

「ム。何よ。」

「ん〜、いや、何でも〜？」

「・・・うわ、ムカツク。マジムカツク。」

「あはは、ゴメン」

「・・・美春・・・授業中絶対寝てたでしょ。」

「・・・ギク。・・・何で分かったの。」

「明らかに朝とテンションが違う。朝はもっと眠そうで元気無かった。」

「さすが愛華さん。ちゃんとわかっていらっしやる。」

「イヤ〜それ程でも〜・・・って、イヤイヤイヤ、私以外の人でも絶対分かるから。かなり違うから。」

「え、そんなに違う?」

「違う違う。」

――

そんな話をしながらご飯を食べていると、あっという間に鐘が鳴り、愛華は「じゃ、またねー」と言って席に戻ってしまった。

「・・・次の授業からは絶対寝ないと思いつつ、数学の先生のゆったりとした口調くちまうたにより、結局暴睡した。」

――

「ただいまー。」

帰宅部の私は夕方頃に家に着いた。

勿論家には誰もいない。

両親共々仕事 중이다。

「一応分かっているものの、やっぱり「ただいま」と言ってしまう。」

日本人の血かなんかなのだろうか。

・ ・ ・ 制服を脱いで私服に着替える。

今日は紫とすみれ色がストライプ模様になっているボーダーに、白い上着を合わせている。

ちなみに下は普通のジーパンだ。

・ ・ ・ 別に、オシャレでも無く、ダサくも無い普通の格好で私は廊下を歩いた。

「君」に会いに。

・ ・ ・ 廊下の突き当たりを曲がって、少し歩くと木でできたドアが見える。

・ ・ ・ ここが、「君」の居る場所だ。

ドアを開けて中に入る。

いつもの様に、「君」はそこに居た。

「 ・ ・ ・ さ、今日も弾きますか。」

そう言っつて腕を捲る。

・ ・ ・ もう分かった人もいるかもしれない。

ーーそう、私の言う「君」は自分家じぶんちやにあるグランドピアノの事だ。

ーー黒いイスに座り、「君」ピアノとほど良い距離をつくる。

近すぎず、離れすぎず、だ。

そして傍にある本棚から楽譜を取り出す。

今回弾く曲は ・ ・ ・ うん、シヨパンの「子守唄 変ニ長調：N O 5 7」  
にしよう。

・ ・ ・ 姿勢を正して、もう一度座りなおす。

ペダルに足を近づけて、深呼吸。

頭の中でリズムをつけて、指に、優しく力を込めた。

・・・最初はゆっくり、なめらかに。  
優しく、低く、音を重ねて。

右手は少しでも音が響く様に、気持ちを込めて鍵盤を押す。  
左手は流れる様に、リズムを崩さず機械になつたつもりで。

リズムを早くして、・・・でも乱暴にならないように。  
早く、優しく、丁寧に弾いていく。

・・・リズムを戻してまた丁寧に弾く。

ちよつと間違えたけど仕様しょうしょうがない。

ミスを見殺して、集中を目と手だけに集める。

・・・穏やかに、最後の一節を弾いて、余韻を軽く残し、ペダルを切った。

とりあえず、腕を膝に置いて、もう一回深呼吸。

昨日（いや、綿密に言えば今日）の夜に弾いたばかりだということにも関わらず、やはりピアノを弾くのは楽しかった。

・・・「楽しかった」という言い方はちよつと違う気もする・・・。  
「楽しい」というより、何か達成感がある、何か気持ち良いついてい  
うか・・・

何ともいえない快感が身体の中に突き抜けるのだ。

そう思いながら、次に弾く曲を選ぶ。今度はショパンの「ポロネ  
ーズ #6 変イ長調 op53 『英雄』」に決めた。

・・・私が、初めて弾いたクラシックの曲だ。

忘れたくないので、毎日一回は弾く様になっている。

.....

「入るわよ？」

ノックと共に聞こえたお母さんの声。

私は我に帰って、すぐにドアを開けた。

「・・・何？」

そう尋ねると、「夕飯よ」とお母さんが言った。

「・・・さつきから何度呼んでもこないから・・・やっぱりここにいたのね。」

「あ、うん。」

・・・この部屋はピアノの為に特別な造りになっている為、外からの声も内からの音も聞こえないし、漏れないのだ。

その為、お母さんが呼んでもこの部屋には全く聞こえない。

・・・まあ、夜中にピアノを弾いても迷惑にならないから凄く助かっているんだけど。

「お父さんも待ってるわよ。急いで。」

「うん、ゴメンゴメン。」

そう言って、ピアノに赤い布を被せ、電気を消した。  
そしてドアを閉めてリビングへと駆け足で向かった。

.....

「珍しいね、お父さんも一緒に夕飯食べるなんて。」

サラダを摘みながら私が言うと、「今日は会社が早く終わったんだ。」とお父さんが答えた。

私は「ふーん」と言っつて、サラダを口に中に入れた。

「・・・あ、コレ美味しい。」

「でしょ？お隣の石川いしかわさんに頂いたの。「ジヨセフィーヌ」っていうドレッシング。」

「え！「ジヨセフィーヌ」?!」

「そう。ジヨセフィーヌ。」

「・・・何かアメリカの台風の名前みたいね。」

「あはは、確かに。」

「ーそんな雑談をして、いつもの様に笑いあう。本当に平凡で、だけど、幸せな時間の一つだと思う。」

「ーそれから夕飯をすませてリビングから出る。」

「・・・これからどうしようかな〜と思いつながらとりあえず自分の部屋へ。」

そつえば宿題があった事を思い出し、教科書とノートを机に広げた。

.....

――どれくらい時間が経ったんだろう。

ふと目を覚ますと目の前に机があった。

少しぼやけた視界・何かコレ、さっきも体験したような・。

急いで時計を見ると0:15。

ぐっすり寝てしまった様だ。

しかも、ノートに小さな水溜りが出来ている。

(・・・わ！やば！よだれ垂らしちゃった！！！)

急いで洋服の袖でノートの表面を拭く。

ちよっと恥ずかしかった。

――

・・・とりあえず、お風呂と歯磨きをすませて、背伸びをする。

不思議な事に、目はパツチリ冴えていた。

――自然に、足が動く。

廊下の突き当たりを曲がって・・・木でできたドアまで来てしまった。

・別に、眠くもなくなってしまったので、ドアを開け、中に入る。

・月に照らされた「君」が、私の事を待っていた。

「早く弾きなよ。」

そう言っている様にも感じた。

――

黒いイスに座り、鍵盤に触れる。

少し冷えた鍵盤が気持ちよかった。

・・早速これから弾く曲を探す。  
・・ラヴェルの「亡き王女の為の Pavane」に決めて、早速弾く事にした。

・・この曲は、私の大好きな曲だ。

- - -

ー出だしをゆっくりと弾き始める。  
ゆっくり、悲しく、愛を込めて・・・

弾きながら、メロディーが涙を零している様に感じた。

だけど、それはただ悲しいだけじゃなくて、気品や、上品ささえも感じられる涙・・・

・・だから、私はこの曲が好きだ。

優しく、悲しくて、何よりも、愛が詰まっていると思うから。

- - -今日は一段と月がサービスしてくれていて、天井についているガラス窓から月光が差し込んできた。

その美しい光に輝く鍵盤に少しだけ見惚れながら、私はペダルをきって、指を鍵盤から離れた。

顔を上げてガラス窓の外を見ると金色に輝く満月が優しく光っていて、ちよつとだけ眩しかった。

楽譜を閉じて、目を瞑る。

ピアノと自分が一緒になった気分になって、凄く気分が良かった。

- - -

——これが私の平凡な毎日。

・・平凡だけど、キラキラ輝いている、大切な毎日。

そんな日々を送れるのは、やっぱり「君」が居るから。  
ありがとう、そう君に伝えるよ。

——君の声を、今日もまた聴かせて。

(後書き)

・・ひ。

凄い駄作っぷり!

何かもう開き直っちゃってる感じです

ここまで読んでくださった読者様!!!!

本当に本当に有難うございます! m ( ( m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2671o/>

---

君の声を聴かせて

2010年10月11日23時44分発行